

カシワ

牧 幸 男

五月は鯉のぼりと柏餅の季節である。薫風に泳ぐ鯉のぼりの姿は、春から初夏への季節の移り変りにふさわしい風情である。子供の頃私はこのお節句が大好きだった。ひとつはショウブを入れたお風呂にただよう香と、柏餅が食べられることだった。ショウブは父が庭から採り、大きな束にしてお風呂にいれ、柏餅は母が作ってくれた。老境になった今でも、菖蒲の香りは懐かしく、柏餅は必ず購入して食べることを忘れない。

屋根より 高い こいのぼり 大きい まごいは おとうさん

小さい ひごひは こどもたち 面白そうに およいでる

と、近藤宮子さんは作詞した。家族のほほえましい姿に、ほのぼのとした気持ちになる。鯉のぼりを建てるのは「わか家に男の子が生まれました。どうぞお守りください。」と天の神様に伝える意味があるとのこと。起原は中国の『後漢書』(25~220)にある「黄河の急流にある龍門と呼ばれる滝を多くの魚が登ろうと試みたが鯉のみが登り切り、龍になることができた。」により、鯉の滝登りは立身出世の故事となった。



女鳥羽川の鯉のぼり



端午の節句の飾り

この行事、わが国では奈良時代(710~794)から祝われておりこの日を「端午の節句」と呼んでいた。端午とは、五月の初めの午の日という意味であったが、いつの間にか5月5日に固定されるようになった。奈良平安時代には、この行事は災厄を避けるための重要な日で、宮廷では埴に菖蒲や蓬を挿し、臣下の人々は菖蒲を冠に飾ったり、菖蒲の葉の薬玉を柱に下げたりしていた。鎌倉時代になると武家の間から菖蒲と尚武をかけ、この日を大切に作る気風が生れるようになった。江戸時代には、端午は幕府の重要な式日となり、大名や旗本は江戸城に出仕し将軍にお祝を述べる儀式になった。

端午の節句に柏餅を食べるという習慣は、江戸で育まれたとされているが、柏餅が登場したのは徳川九代将軍家重(1745~1760)~十代将軍家治(1760~1786)の頃である。この習慣が、参勤交代で日

本全国に行き渡ったとされている。但し、お餅は、柏の葉の少ない地域では「粽」であったり、サルトリイバラの葉であったりしている。

菘さるとりいばら 蕪ちまき(山帰来)はもともと、お餅を包んでいたが、江戸時代に江戸で柏餅が流行したときに葉を大量に入手できなかったため、榲かしわの(柏)を使うようになったと言われている。なぜ、柏の葉で包むかは、この葉が春まで落葉せず、越年し新しい芽が出る時落葉する譲り葉の姿から「子孫繁栄」や「代が途切れない」という縁起が良い意味を含むからである。

現在、市販の柏餅は去年の葉(新鮮な葉は輸入品を使うこともある)を使っている。古い葉を乾燥させて、大量に保存しておき、使うときに煮て柔らかくする。古い習慣では、こしあんは葉の表面のつるつるした方を内側にして餅を包み、みそあんは逆につるつるした方を外側にして区別していた。昔の人は「餅は心地よき物、酒は嬉しき物、茶はさびしき物」とよく言葉にしていたがようだ。餅は稲の霊が宿ると考えハレの日、即ちめでたい日に食べていた。端午の節句と言うめでたい日に粽と並んで結びついたのであろう。



柏餅



落葉しない柏の葉

カシワは日本・朝鮮半島・中国の東アジア地域に分布するブナ科の落葉高木、幹は直立太い枝をだし樹高は10～15m、樹皮には深い裂け目が生じる。新枝は淡褐色の軟毛が密集している。樹皮は黒褐色で、不規則に縦方向の裂け目が入り、深い割れ目がある。雌雄同株で、若葉が伸びる頃、黄褐色の小さな花をつける。葉は倒卵形から広卵形で大きく、葉縁に沿って波状の大きな鋸歯がある。新葉には柔らかい毛が密生し、秋には球形の堅果（いわゆるどんぐり）を結ぶ。葉は紅葉の頃になると黄褐色や赤褐色に色づく。紅葉が終わると、枯れた葉は褐色に変わり、多くは春まで枝についたまま新芽が出るまで落葉せずに残っている。我が国ではこの姿にカシワを「葉守の神の樹」と呼び、冬でも葉が落葉せずに枝に残っているため、そこに神が宿る縁起木と考え、神聖な木としてきた。

柏の木は、私たちの生活には古くから結びついてきたので、多くの歌題の対象になってきた。

稲見野の あから柏は 時あれれど 君を吾が思う 時は実なし 万葉集（作者不詳）

柏餅 誰にでもある 佳き時代 高澤良一

植物名は、牧野富太郎博士の「カシワは炊^{かしきは}葉の意味で植物の葉を盛る葉の意である。昔は食物を盛る葉をすべてカシワと呼んだが、今日では本種の名のみとなった。」による。その他に、葉がか^{かた}たいことから、堅し葉の意味からとする説、食事を盛ることから食敷^{くしきは}葉の意味からという説もある。漢名の榲、榲栗、栲は別のものであると述べているが、栲を含めどれを使っても問題はない。別名に我之波、大葉櫟、大葉作、波樹などが使われる。いずれも柏の葉の外観から呼ばれるようになった。



柏の葉

学名は *Quercus dentata* で、属名はケルト語の *quer*(良質の)+*cuez* (木材)、種小名は「歯のある」、「歯状」の意で、良質の木材で葉の縁が歯のようである意味となる。

古代より柏の葉は、栲はとても神聖なものをして扱われており、神事に供物を捧げるときに器の代わりに用いられ、お参りの時「栲手を打つ」という言葉があるよう神社とも縁が深い。そして、縁起が良い植物と言うことから家紋として栲を使うケースが多い。鎌倉時代には、すでに武家が文様として用いる。主な家紋を列挙した。



薬用には、樹皮を生薬名榲樹、葉を榲葉と呼び、樹皮は下痢、腫瘍に、煎液を火傷に塗布、葉は寄生虫症、淋病、吐血、痔の出血等に服用する。ほかに、小児の虚弱体質には果実の煎液を服用する。

食用は、果実を砕き水で晒し洗抜きすると食べることができる。鶏肉のことをカシワと呼ぶことがあるが、これは地鶏の羽の色が栲の葉の紅葉に似ていることから呼ばれるようになった。

材の利用は、材質は堅く、家具、建材、薪炭、椎茸のほた木など広い用途があり、落葉しないことから冬季の強風を防ぐ防風林に利用する。また、樹皮はタンニンを多く含むので媒染剤やなめし皮用に使われる。

栲の花言葉は「勇敢」「歓待」「独立」「愛は永遠に」「愛想のよさ」「自由」である。

